
その他

順天堂大学保健看護学部 順天堂保健看護研究11
P.76-82 (2023)**両親の関係性が子どもに及ぼす影響
—小説『死の棘』の家族のその後をめぐる発達心理学的考察—****The Influence of Relatedness of Parents on Their Children :
An Analysis of a Family in the Novel “The Thorn of the Death” Thereafter
from Viewpoint of Developmental Psychology****山 岸 明 子***
YAMAGISHI Akiko**要 旨**

島尾敏雄の『死の棘』は妻ミホとの凄惨な争いを克明に綴った私小説だが、ミホが精神的な病から回復した後、島尾夫妻と二人の子どもがどのような日々を過ごしたか、その後の両親のあり方が子どもたちにどのような影響を与えたのかについて、島尾敏雄の著書や彼をめぐる評論、長男のエッセイ等を用いて、発達心理学の観点から検討した。

前稿で『死の棘』時代は子どもたちにある程度の混乱はあったが大きな問題は生じなかったということを論じたが、成長した彼らはそれぞれ深刻な問題を抱えていた。検討の結果1) 彼らに大きな問題をもたらしたのは、『死の棘』時代の尋常ではなかった両親のあり方よりも、その後落ち着いて「愛を取り戻した」と評される平穏な日々の両親のあり方であったと考えられること、2) 問題の中核はミホと敏雄の支配—絶対服従という関係性が、子どもたちに自己原因性を持ってない生き方を強いたことであり、3) それを止める者もいない状況の中で事態がエスカレートしていったということが示された。

索引用語：両親の関係性、支配—服従関係、自己原因性、発達心理学**Key words**：Relatedness of parents, Dominant-obedient relation, Personal causation, Developmental psychology**1. はじめに**

前稿¹⁾では、『死の棘』²⁾の著者島尾敏雄とその妻ミホとの激しい争いと、それを目の当たりにしていた彼らの二人の子ども—6才、4才だった伸三とマヤーの言動について、彼の著作『死の棘』『死の棘日記』³⁾に

基づいて論じ、両親の争いが彼らにどのような影響を与えたのかについて検討を行った。二人の争いはミホが敏雄の浮気を知ったことから始まり、ミホが連日狂ったように執拗に敏雄を問い詰め攻撃し、その内に敏雄もミホの発作に逆上して大声で騒いだり逃げ出したりするようになり、凄まじい混乱の日々が続いた。やがてミホは精神科病棟に入院し（敏雄も付き添って入院）、子どもたちは奄美大島のミホの親戚の家に預けられる。そのような苛酷なつらい経験は二人に悪影

* (元) 順天堂大学

* (former) Juntendo University

響を与えたことが予想されるが、ある程度の混乱はあったものの、適応上の大きな問題はなかったことが論じられた。

しかし『死の棘』時代の経験は長期的効果をもつことはなかったのか。『死の棘』に書かれた後の日々を島尾夫妻と二人の子どもはどのように過ごし、どのような人生を送ったのだろうか。島尾敏雄は作家であるため、『死の棘』のように詳しくはないものの、その後の家族の様子について書いた著作^{4,5)}や島尾敏雄についての評論による資料^{6,7)}があり、また息子の伸三も何冊かの著書を書いており⁸⁻¹¹⁾、実証的な研究ではなかなか得ることができない長期にわたる資料がそろっている。それらを用いて諍いの直接的な影響だけでなく、その後彼らはどうなったのか、なにがそこに関与しているのかの分析も可能と考えられる。本稿では『死の棘』という苛酷な状況を潜り抜けた後の島尾家の様子と両親の問題が子どもにどのような影響を与えたのかについて検討を行う。

2. 子どもたちが置かれていた状況—『死の棘』時代からの変化

誰が見ても異様な『死の棘』時代とその後では、状況はどう変わったのだろうか。島尾敏雄はその後有名作家として活躍していることから状況は好転したのだろうと思われやすい。山本健吉の『死の棘』の解説¹²⁾でも、「一見暗く、厳しくすさまじい世界」が描かれているようだが、「回癒と甦りへの感謝と、愛と勝利への讃歌に満ちている」と述べられている。しかし資料から読み取れる島尾家の様子は、そのようなものではなく、彼らが置かれた状況は以下のようなものであったと考えられる。

1) 敏雄がミホに対して逆反応しなくなり諍いがなくなる一方、ミホの支配が確立する

それまでも敏雄と子どもたちは、ミホが発作を起こさないように最大限の注意をはらって生活してきた

が、発作が起こると敏雄も興奮して騒ぎはエスカレーターしがちだった。しかしやがて敏雄は、ミホは気が狂う程自分を愛していたこと、自分の過ちが妻を発病に導いたこと、そのしこりを完全にときほぐすことが自分の仕事だと考えるようになり、「妻への奉仕」の生活をするようになる⁴⁾。ミホの言うことには何でも従い、彼女が喜ぶように振る舞おうとするため、以前のようなもめごとは起こらなくなる。「たった一つだけ、願い事が叶えられるとしたら、何を願う？」とミホに聞かれると、「お前が暗い顔をしないこと」と敏雄は答え、「お母さんが怒らないようになるのが一番いい」と子どもたちは付け加える³⁾。ミホがすべてを支配し、3人はただそれに従うという体制が出来上がっていった。晩年のミホへのインタビュー⁶⁾でも、島尾から傅くように大切にされ、家族に君臨していたことを得意げに話している。

2) ミホの支配が夫だけでなく子どもたちにも向けられる

敏雄が悔い改めて、ミホに奉仕することに専念するようになると、支配の矛先は敏雄だけではなく、家族全体に向けられるようになる。そしてミホの命令に絶対服従すること、ミホを刺激せず、ミホがいらいらすることはどんなことでも避けるということが島尾家の掟になる⁵⁾。敏雄はミホの荒んだ精神を穏やかにするためにそれが必要と考え、子どもたちにもそれに従うことを要求したが、ミホは自分の気まぐれで全てが決まるということに快を感じ、常にそれを求める様になって支配はエスカレートしていったと思われる。

ミホがいかに支配的だったか、自分の都合だけで命令し、服従を強いたかを、伸三は色々書いている^{8,10)}〈注1〉。やりたいことをやろうとすると嫌がり、また子どもが外で遊ぶことも嫌がって、通学以外は自由に外出させず、帰宅するなり家事を手伝わされた。特に伸三は、全てに度を越して夢中になる母の仕事や趣味につき合わされた。ミホが伸三を瀕死から救ったこ

とがあったが、その後病院通いは彼女の趣味になり、二人はしばしば母の希望で病気にさせられ、病院で注射を打たれるようになった etc。

『死の棘』時代の子どもたちは、両親の争いを見て心を痛め、何とかとりなすという立場であったが、敏雄の態度の変化と共に、ミホの支配・命令（従わない時には攻撃）は自分たちにも向けられるようになったのである。

3) 父親は、妻に支配されそれに絶対服従する者となり、子どもたちを助け世話をしてくれる者ではなくなる

敏雄のミホへの服従は徹底的なものであった。彼が書く小説は常にミホが清書したが、清書しながら書き直すことを島尾は認めていたし、特攻隊長だった島尾にとって、天皇から授けられる芸術院会員になることは信念に反し、仲間を裏切ることであったのだが、葛藤の末ミホが喜ぶという理由でそれを受諾している⁶⁾。

敏雄の父親が奄美に来た時、ミホは昔のわだかまりから子どもたちに会わせなかったし、父親の死去の知らせも入院中ということで敏雄に伝えなかった。事件後ミホは敏雄が一人で出かけることを許さなかったが、その後徐々に解除されたものの、電車賃以外は渡されなかったし、後に認められるようになった出張の時も、敏雄は毎日必ず葉書を出していたという^{5,6)}。彼はミホから疑われないようにと、息詰まるような生活を生涯続けたのである。

そしてミホが子どもたちに言う命令が不合理で理不尽であっても、敏雄は何も言わない。彼らの父親は決して母親に意見してくれることはなく、「共同作戦」として掟を守ることを期待するだけであった（子どもたちは密室的状況を和らげる「同囚の仲間」であると敏雄自身書いている⁵⁾）。敏雄は子どもを支配するミホを止めることなく、むしろミホの関心が自分でなく、子どもに向くように仕向けたとさえ伸三は書いてい

る¹⁰⁾。

敏雄は『死の棘』時代もミホに責められる心もとなない人であったが、それでも発作を起こすミホにどう対処するかを共に考える大人であり、親身に自分たちの世話をしてくれる大人であった。それがひたすらミホに従うだけの人になり、子どもたちはいざという時には助けてくれると期待していた重要な支援者を失った。

4) 周囲からのサポートがなくなる

『死の棘』時代に大きな問題が生じなかった要因の一つとして、彼らが家族以外の大人たちと接触する機会があり、また周囲の人からのサポートを得ていたことを挙げたが、その後の島尾家は周りの人との接触やサポートを受けることも減ってしまったようである。アヤさまく注2 >の支援がいつまで続いたのかの記載はないが、ミホの発作が和らぐにつれなくなって、4人だけの生活になっていったと考えられる。第三者の目があれば、ミホの命令に家族が絶対的に従うということの不健全さが顕わになり、ミホの態度はある程度改められたと思われる。しかし4人だけの密室的状況になれば、ミホの支配は維持・強化されてしまう。発作のような明白な問題はないし、両親は高名な人であるため、子どもたちは命令・支配される苦しみを訴え、改善するように動いてくれる人をもつことはできなかった。

3. そのような状況に置かれたことは二人にどのような影響を与えたのか

母親の養育態度が子どもに与える影響については、心理学で多くの研究がなされてきた。ミホの子どもに対する態度は詫摩がまとめている支配的態度や専制的態度¹³⁾、あるいは Baumrind の権威主義的養育態度¹⁴⁾に該当すると考えられる。詫摩のまとめでは母親の支配的態度は子どもの「服従、自発性なし、消極的、依存的、温和」、専制的態度は「依存的、反抗的、情緒不安定、自己中心的、大胆」と関連があり、Baumrind

の統制と応答性の2軸による類型では、統制、応答性共に高い権威的態度が健全な発達と関連する¹⁵⁾のに対し、統制が強く子どもへの応答性が低い権威主義的態度は保育園での攻撃的行動と関連がある¹⁶⁾等が示されている。

但しミホの場合はその態度は夫にも向けられていて、養育態度というより家族全体を支配するものであり、子どもへの影響はより強いと思われる。家族が置かれていた状況の中核は、ミホからの支配によって自分の意志で行動することができないということと言えよう。島尾家では全てをミホが決め、他の3人はいつもそれに従うだけであった（伸三は後に「自主性もてず、全部受け身、ただ命令を待っている奴隷のようになるんです」と書いている¹⁰⁾。但し父親は贖罪のためにミホの支配に従うことを自ら選んだのであり、そこには自分の意志があった。それに対し子どもたちはそれに巻き込まれ強制されただけで、家庭において自分の意志を持つことはできなかったのである。

自分の意志をもてないそのようなあり方はド・シャーム¹⁷⁾の「自己原因性」のない状態と言える。ド・シャームは、我々は自分の意志で行動し、その結果何事かをなし、その成果をもたらした原因は自分であるという経験「自己原因性」を求め、その経験がやる気や自尊心、存在感の源であるとした¹⁷⁾。しかし島尾家では行為の原因になるのはいつもミホで、子どもたちはミホの言うままに動かされるだけで、自分の意志で行動することは許されず、「自己原因性」を経験することはできない。自分は外界に対して何もできないということを繰り返し経験する中で、外界を変えようという気持ちやその希望をもてない「無力感」が学習されることが示されている¹⁸⁾が、彼らもそのような状況にずっと置かれていたのである。

前章の2)で述べた様に、ミホは自分の都合で様々なことを命令し、服従を強いた。子どもたちはそれをつらく思いながらも、「ミホのすることは無条件でい

いことだ、彼女のすることに間違いはない」ということを家の掟とし、「母の命令に背くことは、行いだけでなく考えてもいけないことになっていた」⁴⁾ため、従わざるをえなかった³⁾。一般的に子どもの多くは親が不当に服従を強いると感じることがあると考えられるが、彼らの場合はその程度が著しく高く、従うことへの圧力も強かったと言える。彼らはいつも自分の感情、欲求を抑え、ミホに従わなければならなかった。特に小学校中学年までミホからの支配の中心になった伸三は、家ではストレスが多くつらい思いをしていた¹⁰⁾。彼は小学2年生位からしゃべるのが嫌になり、口が開かなくなることもあって、自分は「壊れた」とある。更に高学年になるにつれ落ち着きを失い、不安定な精神状態になり、小5の頃からわけもなく破壊的な行動をおこすようになって、教室の後のガラスケースのガラスをバッドで割ったりしたと書いている¹⁰⁾。

年齢と共に母親の専制に対処しない父親への不満が顕在化してきて、「マヤと私がどんなに母親に虐められても、父は遂に助けてくれはしませんでした。私たちがあれほど彼の味方になり、身体を張って母を大切にしているのに」と怒りの言葉を書いたりしている⁷⁾。ミホにおとなしく従っていた伸三は、小学高学年位から母親と距離をおくようになり、従順な息子であることをやめ、やがて熊本の学校に入学して寮に入ることで、家から飛び出す。

マヤは自分の意志がはっきりしていて、まわりの影響を受けずにそれを表明する強さを持ち、小さいながら一人でどんどん積極的に外界にかかわり、自主性や自律性も強かった。伸三も「元気で頭もよく、何でも自分でやる子」と書き¹¹⁾、敏雄も「精神的に強くたくましく、何があっても、一人になっても、マヤだけは生き残るだろう」と言っていたとある⁷⁾。島に来てからも、マヤは伸三よりも島の生活に馴染んでいて、元気で体力もあり、いじめられている伸三を助けたり虫を追い払ってくれたりしていた¹⁰⁾。そして伸三がミ

ホの手伝いをさせられていた時、マヤは遊びに行っていないと伸三は書いており¹⁰⁾、伸三に比べるとミホから受けた弊害は少なかったようである。しかし自主性が高く何でも自分でやるマヤは、明確な自己原因性を経験していたため、ミホの支配でそれを否定されることの打撃が大きかったと思われる。それが原因かどうかはわからないが、彼女は小学3年生の頃から次第に発音がもつれて聞き取りにくくなり、ついに言葉を発することができなくなってしまう。そして身体の動きもぎこちなくなっていくという。両親はいくつもの医療機関を回ったが原因はわからず、その障害を直すことはできなかった。

マヤは前稿で述べた様に、いやなことがある時はいやであるとしっかり表明して、子どもなりに現実的な対処ができるし、不利なことがあってもくじけずに巧みに対処できる（父親の悪口を言った友達を家に連れてきて「ほらね、うちのお父さんは気狂いなんだよ」と得意気に言った²⁾という様に）。しかし対処のしようのない大きな問題に直面した時、マヤはその苦しみを外に発散せず、自分の内部に向け、それが身体的症状になってしまったのではないかと。小3から始まった言語障害は、小6位から話せないというように悪化し、足も悪くなっていくが、ミホの支配を受けて「自己原因性」を否定された彼女は、自分の言いたいことを言い、自由に動き回るということを諦めたのではないかと。

伸三が心理的・物理的にミホの支配から逃げ出すと、マヤはミホの支配を一身に受けることになり、マヤの置かれた状況は悪化する。伸三が逃げ出すことでミホが支配する密室は更に息苦しくなり、サポートを得るどころか、つらい状況を共に生きる仲間も失い、マヤは更に困難な状況を生きねばならなくなったといえる。

4. 青年期・成人期の二人

その後の二人についての情報は少ないが概略は以下の通りである。

伸三は自分のその後について、中学生から現在に至るまで何らかの神経症に侵されていて、壁を夢中で蹴り続けたりしたこともあり、狂気の中にあっただいともいいと書いている¹⁰⁾。卒業後は写真の道に進み、実家には寄り付かず、身分は不安定なまま東南アジアに写真を撮りに行ったりし、「精神的には壊れていた」が気ままに過ごしていたようである。妻になる女性と出会ったことが彼を救い、内面はまだボロボロだったが、自分を取り戻すきっかけを得たという¹¹⁾。しかし彼の著作は、両親への恨みを含んだアンビバレントな気持ちと、痛々しい姿で亡くなってしまったマヤへの罪悪感のためなのか、他者への攻撃性を誇示するような否定的で偽悪的な記述が見られ、まだ内面的に問題を抱えているように思われる。伸三は（ミホとのことは神から与えられた試練と考え、ヨブ記のヨブのように生きようとした敏雄に対し）「父はヨブのように振る舞うことはできても、自分たちはその精神的浄化を受け取ることはできない」¹¹⁾と、敏雄が自分の救いを追求するだけで子どもたちのことを考えていないことを非難し、両親に壊された自分はこのように決して望ましいとはいえない生を生きるしかないのだということを書き続けている（なお『死の棘』時代についての言及はどの著書にも見られない）。

マヤはカトリックのミッションスクールに通い、敏雄が鹿児島県の短大の図書館長の時、その図書館の司書になったことがあるようだが⁵⁾、その後一家は茅ヶ崎に転居しているためわずかな期間だけで、それ以外は家で過ごしていたと思われる。その頃の様子を示す資料は少ないが、マヤは「何かを手を持っていても『マヤ』と母親に声をかけられると、なんでもぼいっと手放す」「命令に忠実に従うロボット化していた」と伸三は書いている¹¹⁾。

父の死後、病気がちになったマヤは、島を離れて伸三の家の近くに住んで、歯の治療等を受け、また自立して生きていくための訓練を受け、ワープロを教える

スキルを身に着ける。そして鼻歌を歌うようにもなり、自分に自信がでてきたという。しかしミホから島に帰ってくるようにと言われると帰ることにしてしまう。マヤは自分の意志でその選択をしたのだが、伸三はミホと二人きりで暮らす中でマヤは生きる望みを失って死んだと考え、「自分の意志で、自分なりに納得のいく生き方をする能力があるのに、死なせてしまった」と悔いている¹¹⁾。敏雄の死後、ミホは思うままに動かす存在としてマヤを必要とし、マヤと二人きりの世界を作ったようである。ミホは「マヤの顔には決して怒りや痛みが見られない」と言っている⁷⁾が、マヤは母親の全てを受け入れて従っていたのだろう。話すこともできず、孤立無援で、ひたすら専制的な母親に尽くすという人生を、平成14年52才で閉じた。

5. おわりに

前稿で、伸三とマヤは『死の棘』時代はある程度の混乱や不安はあったものの大きな問題は生じなかったことを論じたが、成長した彼らはそれぞれ深刻な問題をかかえていた。幼少期の問題がその時は大きな問題にならなくても、思春期等になって問題化することはよくあるが、彼らの場合はその問題をもたらし中核的な要因は、『死の棘』時代の尋常ではなかった両親のあり方よりも、その後落ち着いて「愛を取り戻した」と評される平穏な日々の両親の関係性であり、二人の支配—絶対服従という関係が共に生活する家族に自己原因性をもてない生き方を強いたことであることが論じられた。

虐待やいじめ、貧困、ヤングケアラー等、現代の子どもたちをめぐる問題は多いが、目につきにくい歪みに目を向けていくことも重要と考える。

<注>

<注1> 子どもの認知は時に主観性が強かったり一面的な場合もあるが、伸三はそう感じていたということ

であるし、ミホの支配の様子や強さがわかる。

<注2> ミホの叔母で、二人を預り親身に世話をした。両親が奄美大島で共に住むようになってからも、支援を続けてくれた。

引用文献

- 1) 山岸明子：両親の諍いが子どもに及ぼす影響—小説『死の棘』の家族をめぐる発達心理学的考察—，順天堂保健看護研究，10，27-34，2022.
- 2) 島尾敏雄：死の棘，新潮社，1977/1981.
- 3) 島尾敏雄：死の棘日記，新潮社，2002/2008.
- 4) 島尾敏雄：妻への祈り・補遺 妻への祈り—島尾敏雄作品集 中央公論社，1958/2016.
- 5) 島尾敏雄：日の移ろい 妻への祈り—島尾敏雄作品集，中央公論社，1958/2016.
- 6) 梯久美子：狂うひと—「死の棘」の妻・島尾ミホ，新潮社，2016.
- 7) ソコロフ (Sokorofu, A.)・島尾ミホ・吉増剛造：ドルチェ、優しく—映像と言語、新たな出会い，岩波書店，2001.
- 8) 島尾伸三：月の家族. 晶文社，1997.
- 9) 島尾伸三：星の棲む島，岩波書店，1998.
- 10) 島尾伸三：ケンムンの島. 角川書店，2000.
- 11) 島尾伸三：魚は泳ぐ—愛は悪，言叢社，2006.
- 12) 山本健吉：解説，島尾敏雄 死の棘，新潮社，1981.
- 13) 詫摩武俊：性格はいかに作られるか，岩波書店，1967.
- 14) Baumrind, D. : Current patterns of parental authority. *Developmental Psychology Monograph*, 4, 1-103, 1971.
- 15) 荻田純久：親の養育態度と子どもの行動傾向に関する基礎研究，大阪商業大学共同参画研究所紀要，2, 1-15, 2021.
- 16) 中道圭人・中澤 潤：父親・母親の養育態度と幼

児の攻撃行動との関連, 千葉大学教育学部研究紀要, 51, 173-179, 2003.

- 17) deCharms, R. : Enhancing Motivation : Change in the Classroom, 1976. 佐伯胖訳: やる気を育てる教室・内発的動機づけの実践, 金子書房, 1980.
- 18) Peterson, C., Mayer, S. F. & Seligman, M. E. P. : Learned Helplessness : A Theory for the Age of Personal Control, 1995. 津田彰監訳: 学習性無力感—パーソナル・コントロールの時代をひらく理論, 二瓶社, 2000.